

~ 2 獣種別対策 ~

被害対策のためのニホンジカ基礎知識

対策のポイント

所変わればシカの生態も変わる

馴れを起こさせない対策

防護柵と捕獲は被害防除の両輪

シカを誘引しない農地管理

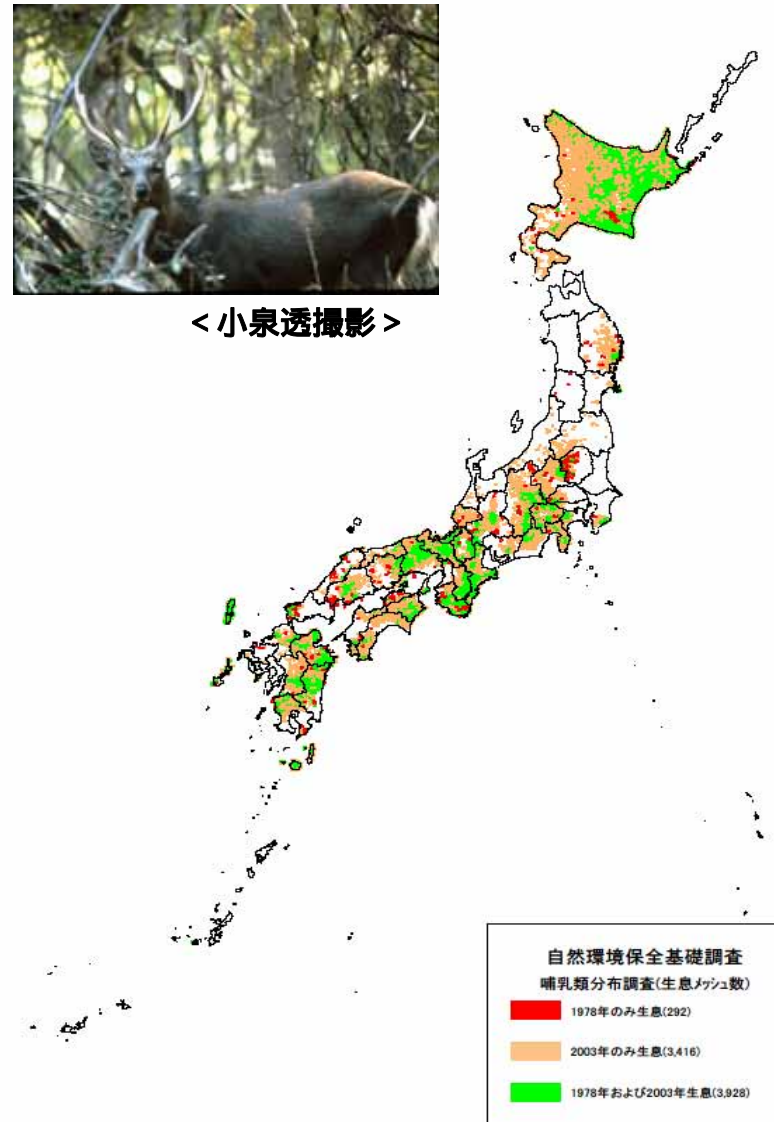
ニホンジカの分布域

国内の40%の地域に生息し、分布域は25年間で約1.7倍に拡大。

北海道から沖縄（慶良間列島）まで全国的に生息。



<小泉透撮影>



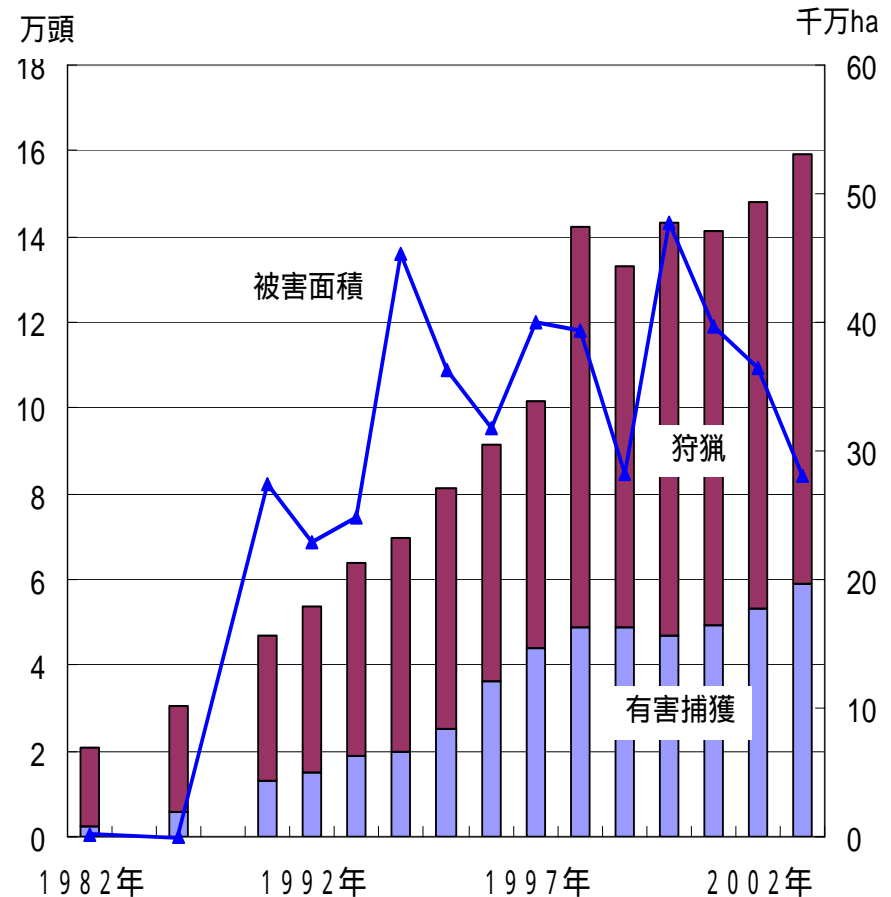
環境省生物多様性センター「自然環境保全基礎調査」より

ニホンジカの被害

農業被害は約40億円（平成16年度）。

森林被害は「獣害」の中で第1位。

年間の捕獲数は10万頭を超え、この20年間に約7倍に増加。



環境省「鳥獣統計」より

農林水産省「生産局農産振興課資料」より

シカは長寿命

野生の最高寿命は、オスは14才、メスは18才。

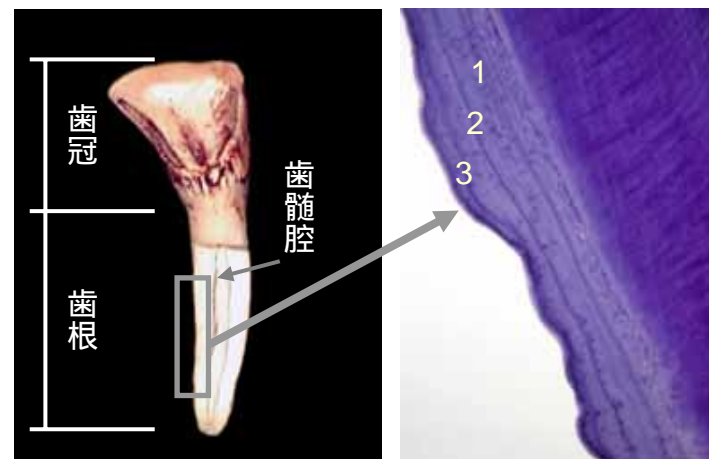
奈良公園では、24才のメスの記録がある。

平均寿命は、オスは4～6才、メスは6～8才。



<小泉透撮影>

下あごの第1切歯(上図の矢印)を使って年齢を調べます



<小泉透撮影>

歯にできる年輪を数えて正確な年齢を調べます(満4才のシカ)

毎年子どもを産む

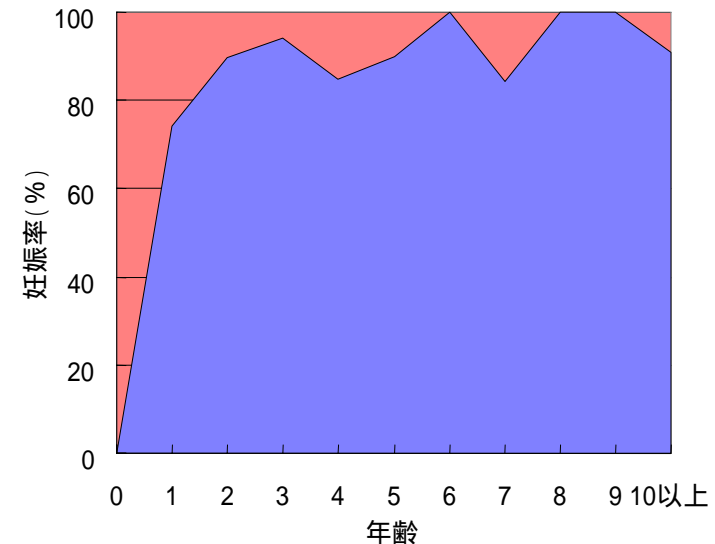
エサ条件がよければ、メスは満1才の秋に発情。

1産1仔だが、妊娠率は高い。

高齢になっても、高い妊娠率は下らない。



<小泉透撮影>



メスジカの年齢別妊娠率 (Koizumi, 1992)

何でも食べる

シカはウシと同じ反芻動物。
さまざまな植物をエサにし、その数は1千種を超える。



<小泉透撮影>

牧草は大好物



<堀野眞一撮影>

新植地ではヒノキが食害される



<小泉透撮影>

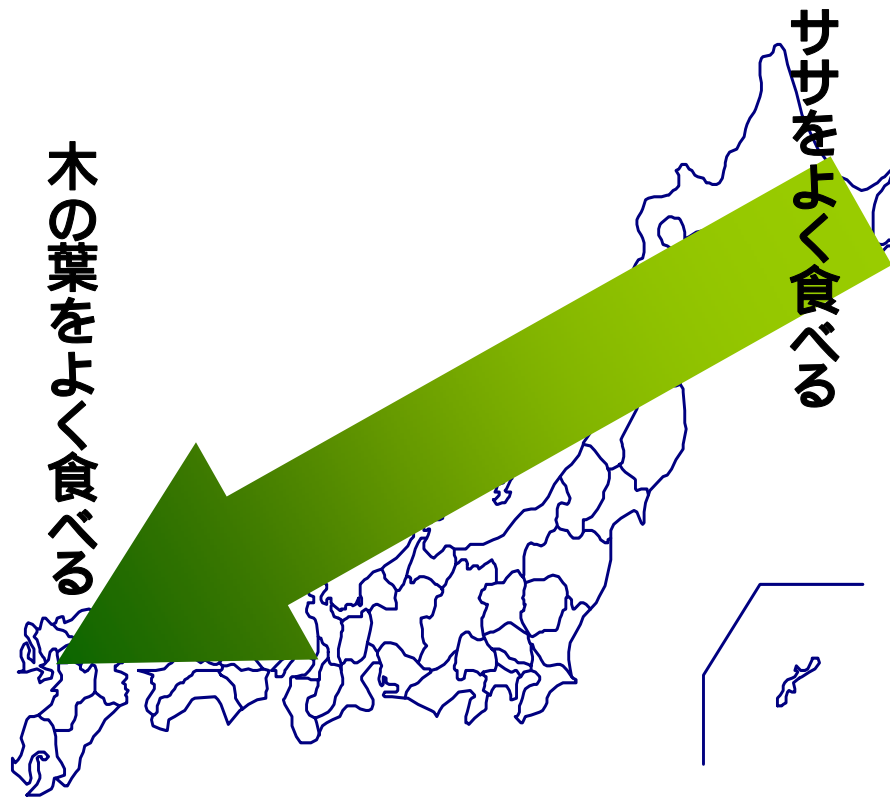
イネも好んで食べる



<小泉透撮影>

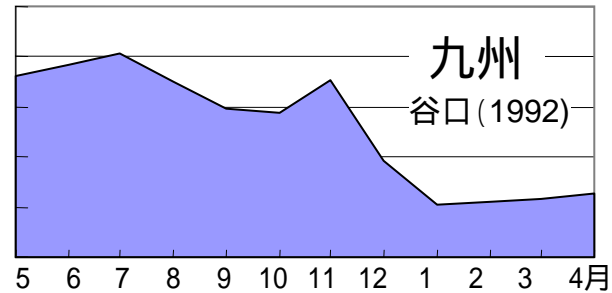
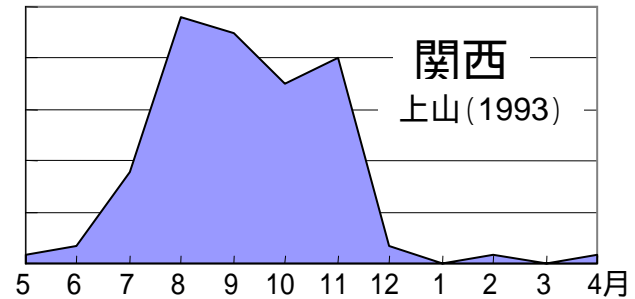
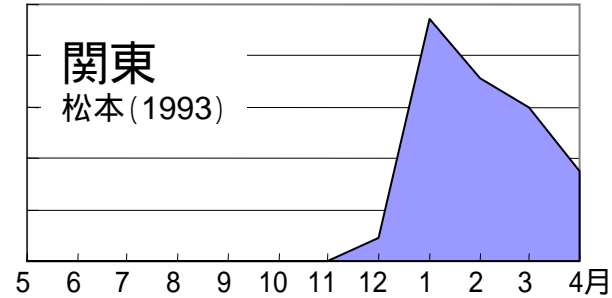
ササは北日本のシカの主食
(シカの採食でササが消えてしまった自然林)

所変わればシカの生態も変わる



食性も変わる

地元のシカをよく知ろう



被害発生時期も変わる
(スギ・ヒノキの食害の場合)

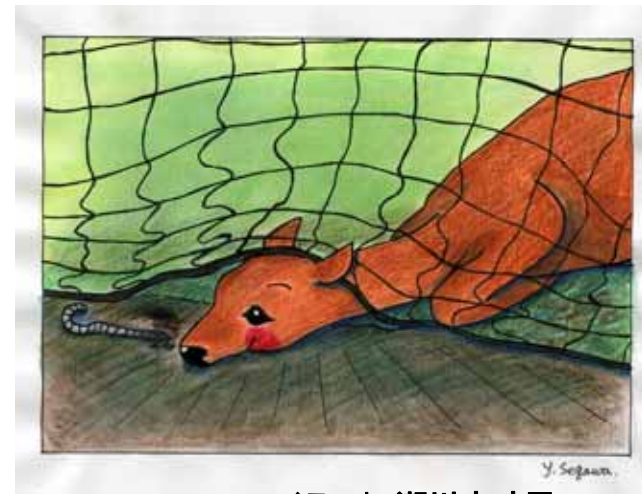
シカは臆病だが大胆

「かかし」や「強いに
おいのするもの」を置
くと、警戒してしばら
くの間は出てこない。



し
か
し
・
・
・

危害がないことが分か
ると、農地の中に入り
込んで来る。



馴れを起こさせないことが重要。

シカの痕跡、シカの被害



足跡

偶蹄類のため、左右対称
の半月様の蹄跡が残る <小泉透撮影>



枝葉採食害

上顎に前歯が無い
ため、摘み取ったような
食べ跡になる <小泉透撮影>



糞

米俵のような形をして
いる <小泉透撮影>
カモシカと異なりタメ糞
をしない



剥皮害

樹皮を食べる場合とオス
が繁殖期に角をこする
場合とがある <小泉透撮影>

主な防護柵とその特徴

1. 一般的な柵の形



ネット柵では支柱と支柱の間にペグを打って下止めする

2. 資材は金属フェンスとネットが多い



<堀野真一撮影>

効果は高いが、設置費用もかなり高い



<小泉透撮影>

シカに食い破られないように鋼心の編みこまれたネットもある



<小泉透撮影>

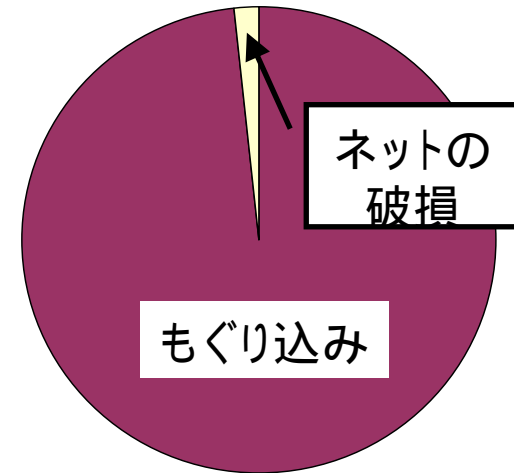
雪の少ない地方では防風ネットも有効

シカはもぐり込んで侵入する

穴、すき間のあいた柵は効果がない（助走なしで2mの高さを跳ぶことができるが、ほとんどは「もぐり込み」による侵入）。

**凹地をまたがないように張る。
無理に広く囲わず、確実に防護する。**

シカが絡まない資材を選択する（網目5cm程度のネットが望ましい）。



柵への侵入原因(池田, 2002)



<小泉透撮影>

ネット柵に絡まったオスジカ

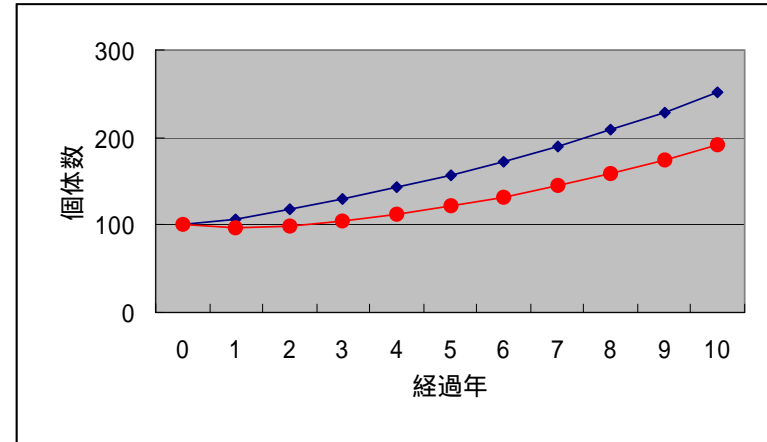
メスを多く捕獲する

メスを多く捕獲することが効果的。

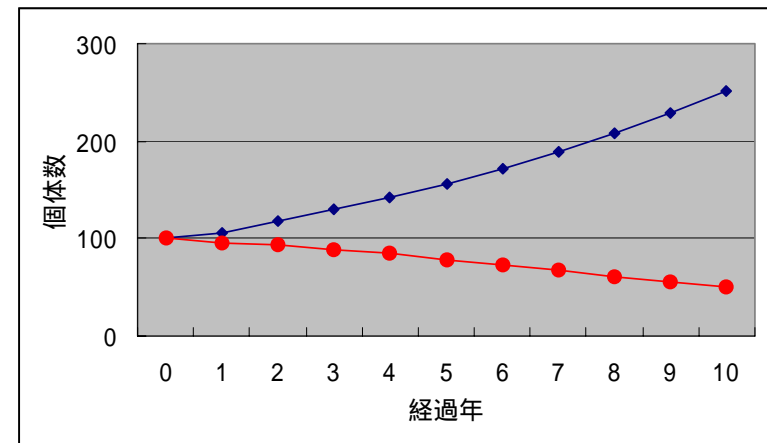
被害が激しくなる前（シカが増加する前）に捕獲を開始する。

被害が激しい地域では、被害地周辺を繰り返し捕獲する。

メスジカは狩猟鳥獣でないため、特定鳥獣保護管理計画の策定により、個体数調整や有害捕獲により捕獲する。



捕獲しない場合(青線)とオスだけを駆除した場合(赤線)の個体数の変化予測



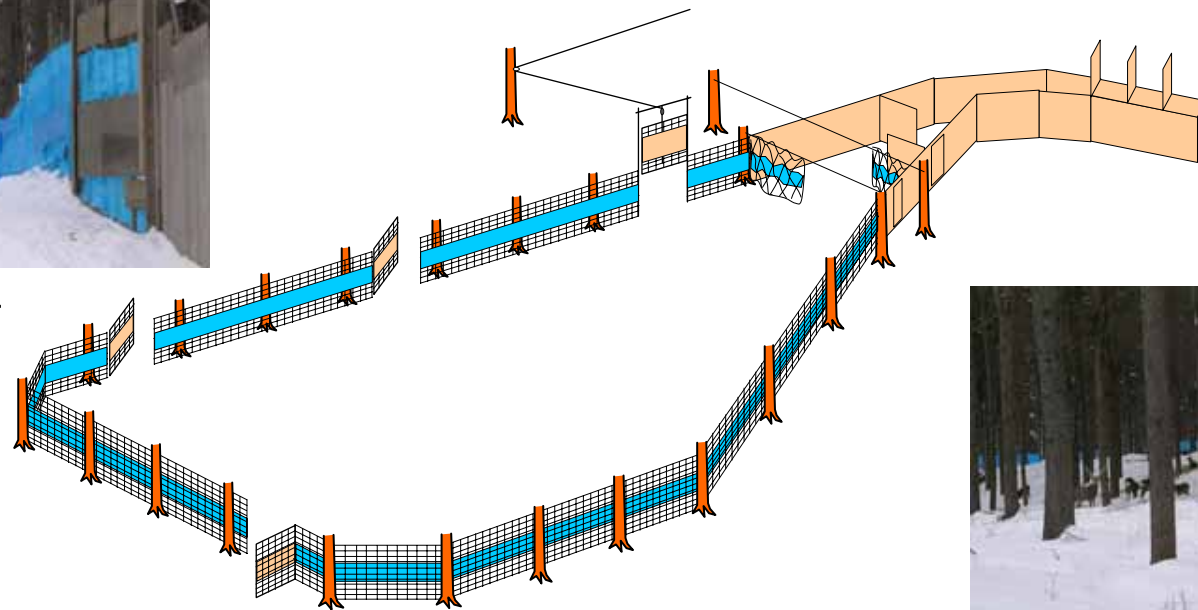
捕獲しない場合(青線)とメスだけを駆除した場合(赤線)の個体数の変化予測

効率的な捕獲

秋や冬にシカが集まる地域では、捕獲用の柵にシカを誘引し効率的に捕獲することが可能。



< 高橋裕史撮影 >



< 原図: 高橋裕史 >



< 高橋裕史撮影 >

危険な作業をともなうので専門家の指導のもとに行う。

シカを寄せない集落環境管理

集落での目当ては農作物よりも雑草。
雑草で集落に餌付けされ、ついでに農作物も食べる。

以下の点に注意が必要。

シカに配慮した農地管理、作業体系で雑草量を減らすのが先決。

雑草にも配慮した柵の設置と管理が必要。

秋の除草が冬の草量を増やす

除草作業は新たな雑草の再生を助長。

秋期に除草を行った路肩や圃場では厳冬期に緑草が繁茂。

緑草がシカを寄せ、農作物被害へと拡大。

冬期に雑草を繁茂させない工夫が必要。



<井上雅央撮影>



<井上雅央撮影>

水田の雑草生産量を減らす

稲刈り時期が全国的に早まったため、秋期～冬期に水田と畦畔が草地化しやすい。

水田は稲刈り直後に耕耘して再生茎葉の繁茂を、また、12月～1月に再度耕耘して冬期雑草の繁茂を阻止し、集落がシカの餌場となることを防ぐ。

稲刈り直前の畦畔刈り払いは必要最小限に。

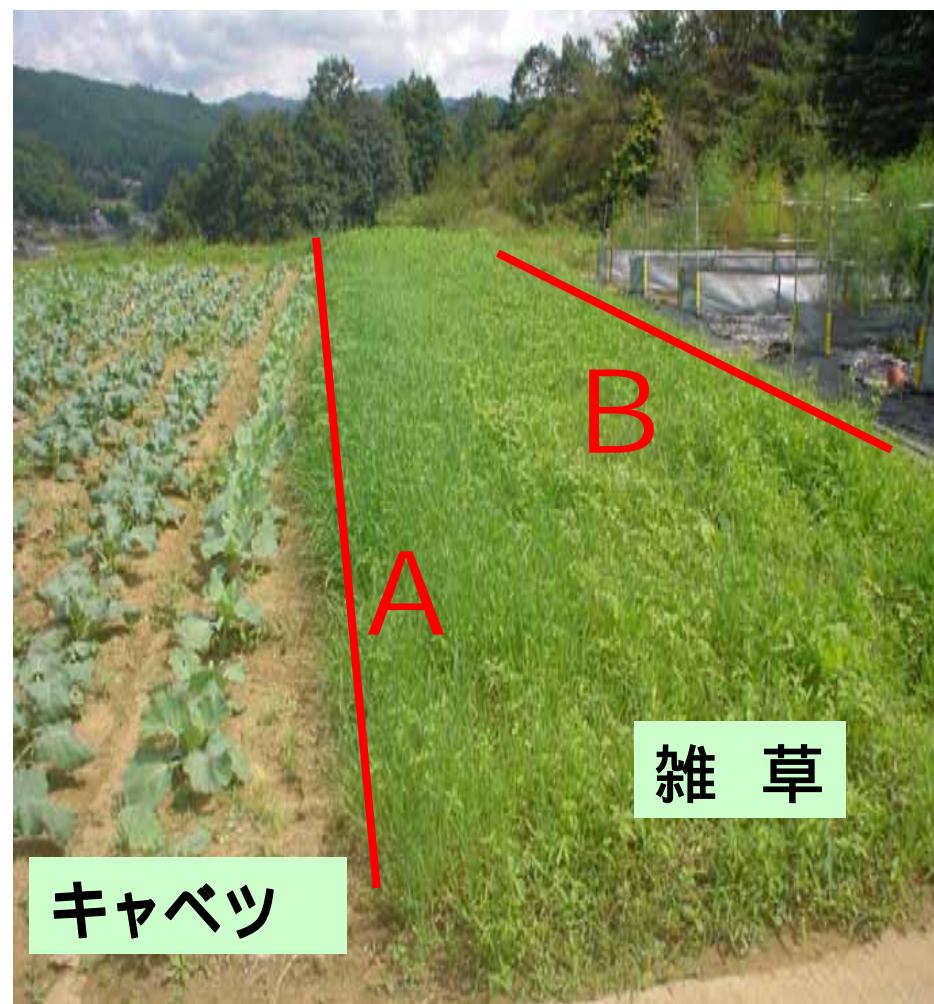


<井上雅央撮影>

雑草に配慮した柵の設置と管理

農作物だけを柵で囲っても、緑草が食べられれば餌付けは進む。

柵の設置位置や雑草管理への配慮が重要。（Aの位置に設置する場合は、雑草管理が必要。）



<井上雅央撮影>